

## 多胎児支援の方法に関する研究

服部律子 谷口通英 堀内寛子 布原佳奈 兼子真理子 荒尾美波 両羽美穂子 (大学) 田口由紀子  
福士せつ子 松原千里 (県立多治見病院) 宮本麻記子 永田晴美 細江富士子 (県立岐阜病院)

### I はじめに

近年不妊治療の普及に伴って、全国的に双子・三つ子をはじめとする多胎児出産は、増加している。1950～70年代には、双子の出産は、出産千に対して、6.1～6.4程度であったが、1980年代後半より、年々上昇を続け2002年では11.0となった。双胎妊娠はハイリスク妊娠として位置付けられ、妊娠中の異常の発生率も単胎の妊娠に比べると高く、妊娠中毒症は20～30%、早産は42.2%であるといわれている。また双胎の周産期死亡率も高率であり、1980～1991年では出生千に対し双胎では46であり、単胎の5～6倍である。

岐阜県の現状も同様に、多胎児の出産は、2002年では双子227組、三つ子3組と増加している。出産率は11.7であり全国平均より高くなっている。

多胎児の育児は、妊娠期から母親にとってトラブルが多いことが知られており、特に乳幼児期の育児は心身ともにストレスが高い。岐阜県でも多胎児の支援活動は、最近活発に行われるようになってきた。しかし、県内の多胎児出生数に関しては、地域による差が大きく、過疎化の進む地域では、広範囲な地域に双子が年に1～2組生まれる状況なので、市町村単位での育児支援は難しい。増加する多胎児家庭に対し、十分な支援は追いついていないのが現状である。多胎児を産み育てる家族への医療福祉の充実は、一般の育児支援や障害児など特別なニーズをもつ子ども達への支援活動にも、繋がっていく事が期待される。

本学では、多胎児支援について、地域や病院と継続して取り組んできた。今回は地域での支援の状況を調査し、母親を中心とする育児サークルの活動について検討した。また病院の多胎児支援については、妊娠中の入院時のケアや、外来での保健指導など、主に妊娠期からの支援についての取り組みを行った。今回はそれらの現状を報告し、今後の多胎児支援につなげたいと考えている。

### II 岐阜県内の多胎児の育児支援調査

調査対象は、岐阜県内の市町村や保健所の保健師である。調査内容は、多胎児の年間出産数、多胎児の育児支援状況、育児支援で困っていること、多胎児の新生児訪問の状況などである。調査は郵

送にて行った。郵送数87、返答があったのは52(60%)であった。

さらに育児サークルの活動状況は、県内の育児サークルの協力を得て、現在活動しているサークルの現状と問題点について、質問紙調査を行った。

### III 岐阜県内の多胎児支援の現状と課題

#### 1. 多胎児出生数と支援の現状

多胎児の年間出生数は、表1のとおりで、年間に一組も生まれない市町村が半数以上であり、管轄の地域での対象数が少ない。

表1 市町村における年間多胎児出産数

0～1組	27
2～3組	7
4～6組	7
7～10組	2
10組以上	6
不明	4
計	53

#### 多胎児サークルの支援状況

・多胎児サークルを支援していますか？

はい 6(12%) いいえ 41(79%) 無回答 5

・多胎児教室を開催したことがありますか？

はい 3(6%) いいえ 44(85%) 無回答 5

であった。支援の内容と各市町村の状況は表2に示した。多胎児教室を開催したことのある保健所・保健センターは以下の3箇所であった。

表2 市町村における多胎児支援の内容

- \* 高山市保健センター (年1回の情報交換、交流会)
- \* 海津町保健センター (16年度1回多胎児及びその家族を対象とした会を開催。今後も状況を見て開催を検討していきたい。内容は身体計測、情報交換、保護者同士の交流)
- \* 瑞穂市保健センター (年に3回の頻度で開催、内容については親子遊びなどを取り入れながら、母親同士の交流が図れるようサポートしている。今後においては内容等をさらに充実させていきたい)

他の市町村は、近隣の市町村のサークルを紹介しているところが多かった。多胎児サークルを支援していない理由について、表3にまとめた。

表3 多胎児サークルを支援をしていない理由  
複数回答あり

① 多胎児の家族が少ないので、保健センターが主体でサークルは立ち上げない	27
② サークルを立ち上げたいが保健センターで支援するだけの、人的経済的余裕がない	5
③ 母親や家族がサークルを立ち上げれば支援したいと考えている	20
④ 多胎児の保健指導について、十分な知識がないので積極的に支援していない	3
⑤ その他	9
計	64

地域の保健センターなどで多胎児支援が難しい理由として、最も多かったのが、「多胎児の家族が少ないので、保健センターが主体でサークルは立ち上げない」というもので26(50%)、「母親や家族がサークルを立ち上げれば支援したい」が20(38%)、「サークルを立ち上げたいが保健センターで支援するだけの人的経済的余裕がない」が5(10%)、「多胎児の保健指導について十分な知識がないので積極的に支援していない」が3(6%)であった。

## 2. 家庭訪問について

家庭訪問については、回答のあった市町村では多胎児家庭には訪問に行くことが多いが、すべての家庭ではなく、第2子以降などは該当しない場合もあるようであった。

表4 多胎児の家庭訪問をしていますか？

すべての家庭に行っている	23(44%)
必要な家庭だけに行っている	23(44%)
行っていない(多胎児がいないため)	4(8%)
無回答	2(4%)

家庭訪問について、多胎児サークルでは、保健センターと協働して、家庭訪問を行っている例がある。

### 多治見市保健センターの例

#### 多胎児サークルへの支援と連携

多治見市の場合、多胎児の出生確認後、サークルの方に連絡して訪問を実施してもらっている。多胎児とわかった時点でサークル代表者の連絡先を母親に知らせている為今のところ問題ない。サークルが独自で立派に活動してみえるため、保健センターは要請があった時などに会に参加する程度である。

多胎児サークル「みど・ふあど」集会はすべて保健センター内で行っている(会場費無料)。会員の中から1名、多治見市保健センターの母子保健

推進員をだしており、妊娠中から多胎児の訪問などに努めている。東濃地域保健所と共に県の未熟児健全育成事業を推進し、年2回託児つきの多胎児育児講座を開いている。

### 関市保健センターの例

「ツインズクラブ」交流会と役員会に会場を無料で開放している。会報の印刷費や郵送費は保健センターで負担している。一度に複数の母子手帳を交付申請に来た方に、保健師よりツインズクラブの紹介がある。ツインズクラブに連絡先をお伝えしてよいかどうか、了解をいただき、了解された場合、ツインズクラブに妊婦さんの連絡先を伝える。または妊婦さんの方から直接電話を入れられることも多い。サークルから妊婦さんへお電話をし、訪問が可能であれば、家庭訪問や入院先の病院訪問をしている。

## 3. 多胎児支援の課題(表5)

さらに多胎児支援の課題を寄せられた回答の自由記載から分析した。

その結果、以下の内容があげられた。

- ・ 実際の育児を手伝うヘルパーやボランティアの制度がない
- ・ 広域での多胎児支援サークルが必要
- ・ 多胎児支援に関する情報や支援のための知識が少ない

などであった。

## IV 多胎児サークルネットワークとサークルのかかえる課題(表6・表7)

関市の多胎児サークル「ツインズクラブ」のスタッフが、今年度子育て支援基金の助成金を得て、講演会やサークルネットワーク会議を開催した。講演会は11月6日(土)、関市わかさプラザで行われた。講師は看護大学、服部律子と多胎育児サポートネットワークの久保田奈々子氏であった。参加費、託児費無料で参加者は約80名であった。多胎児の母親はじめ、医師、助産師、保健師、看護師、子育て支援に関わる人々などの参加があった。サークルネットワーク会議は9月5日(土)に羽島市の看護大学で開催された。「ツインズクラブ」のスタッフが呼びかけ、全国に先駆けてネットワーク会議がもたれた。参加サークルは10で参加者は33名であった。

多胎児サークルが自主的にとったサークルの活動に関するアンケート調査の結果、サークルが抱えている課題として、①行政の対応 ②スタッフ

の世代交代 ③スタッフへの負担 ④サークル活動の向上・経済的問題 ⑤家族の協力 ⑥会員の確保・広報があげられた。

ネットワーク会議では、2 時間にわたりさまざまな課題が討議され、有意義であった。今後も1回は情報交換会をはじめ、サークル活動について討論会をする予定である。

#### V 病院内での多胎児支援

地域での支援調査や育児サークルの調査、育児サークルのリーダー会の開催などを通じて、妊娠期からの支援として、サークル会員が病棟訪問を始め、効果を挙げている。

#### 討論

- ・ 多胎の母親からの意見を聞くと、妊娠中からの指導が十分でなかったり、産後1年は全く外出ができない状態であったり、サークル等を知らない人も多い。妊娠中からインターネット等にはあがってこないような、その地域の情報を提供していく必要がある。多胎に関する本も保健センターや、図書館などに入っていると、利用しやすいのではないかと。また母親だけでなく、夫や家族に情報を提供して、母親だけの負担を減らす働きかけも必要である。
- ・ 地域の多胎育児サークルの方に、病棟に来てもらい、入院中の多胎の妊婦と、夫も交えて話ができる機会を作った。入院中のことや、

小学生になってからの話題もあり、妊婦からは、退院後の自信につながったとの意見があった。施設と地域の連携を今後も考えていきたい。

- ・ サークルは参加したくても、2人の子どもを連れていくことの負担や、知らない場に参加する事に抵抗が多少あるものだと思う。保健師として、個人と集団の最初のつなぎやきっかけ作りのところで、支援して少しでも早い時期での参加を促したい。参加した母親が得たいものが得られれば、次へつながっていくと思う。
- ・ 出生数自体の少ない地域では双胎対象のサークルはないが、地域のサークルに双胎の母親が参加することで、他の皆に見守られて、育ちあった事例がある。地域の中で双子やその母親を認めて見守っていくことが大切である。保健師としても、母子手帳交付時などにも面談をしてサークル等も紹介しているが、勧める側として自分達もサークルに参加し実態を把握していないと勧められないし、勧め方がかわってくると思う。
- ・ サークルに参加することを、他者から遊びに行く感覚で捉えられてしまうこともあるように思う。地域の病院や、保健センターが少しでも関わっていけば、より多くの親が参加しやすいものになるのではないかと。

表5 多胎児の育児支援をしていく上で困っていること

#### 実際の育児を手伝うヘルパーやボランティアの制度がない

- ・ 核家族で夫以外協力が得られない場合、フォローできるサービス（特にボランティア）がなく、1時間1,000円程度の託児くらいしか紹介できるサービスがなく、結局母親がムリして赤ちゃんを見るしかないということになっている。
- ・ 育児の相談にはのれるが、実際面で手を貸して手伝うことまでは不可能なため、直接手を貸してくれるボランティアやヘルパーなどの制度があると良い。
- ・ 祖父母が高齢であったり、核家族の場合に育児を手伝ってくれる人がいない。そのため外出するのも困難な状態で、サービスの充実が必要である。
- ・ 多胎児の場合、育児を手助けしてくれるヘルパーやベビーシッターのような人的サポートの要望が多い。しかしながら、それらの情報は市町村でもほとんど把握できていない。
- ・ 育児をサポートしてもらえる人的サービスはないかと尋ねられることが多かった。
- ・ 核家族化等、家庭内に日常的に直接的育児の援助者が得にくい。又、高齢出産傾向のため、母親はじめ、家族の健康に支障が生じやすいことが多い。しかし、育児への日常的な援助・協力ができるサービスが不足している。
- ・ 保育ボランティアの参加が少ないこと。
- ・ ベビーシッター協会が実施している家庭訪問事業については紹介するものの、回数等に制限があり、日頃の育児のサポートにまでは至らない状況。経済的にも負担なく利用しやすい制度があるのなら教えて欲しい。
- ・ 子育てサポート等の紹介はできるが経済的負担の問題もあり解決できないこともある。
- ・ 多胎児の育児支援をするホームヘルパーサービスの体制が整備されていない。

#### 広域での多胎児支援サークルが必要

- ・ 交流会は市単独では難しいので広域であると良いのでは・・・。

- ・ 多胎児の母親同士の仲間づくりについて。特に外出がしにくい乳児期の支援について。
- ・ 対象者が地域ごとだと少なくなるが、市全体としてグループができれば交流会を通して情報の交換ができるのではと思います。先輩ママから情報を得ることもできると具体的なアドバイスができる。
- ・ サークルが近くにない。・身近に（郡内）多胎児の育児サークルがない。
- ・ 地域的に祖父母の援助を得られやすいところなので、来所される方は日々、祖母に協力を得ている方が多いです。でもお母さん同士交流できればより良いと思います。・多胎は年間数件であり、個々の対応をしている。
- ・ 対象が少ないのでサークルを立ち上げたり、経験者からのアドバイスが受けられない。
- ・ 市町村によっては、多胎児支援サークルがないので、近隣市町村のサークルを紹介するが、地元のサークルではないので抵抗がある。

#### 多胎児支援に関する情報や支援のための知識が少ない

- ・ 多胎児の出生数が少ないので支援する側に情報が少ない。研修などで知識を得ていく必要あり。
- ・ 情報不足。未熟児で生まれるケースが多く、病院での定期観察されている母親より、病院でみてもらっていますから・・・といわれたことがあった。
- ・ 問題解決策がわからない。（十分な知識がない） ・多胎児の保健指導について十分な知識がない。
- ・ 知識、情報が少ないため育児に関する具体的なアドバイスを行えない。
- ・ 育児環境に問題があったり、疾患があれば他児と同様に早期から関わるようにしているが、多胎児に関する知識に欠けるところがあり、積極的に関わっていないのが現状である。

#### その他

- ・ 今のところ特になし。保健所が中心となってサークル活動等実施しているが、実際の様子を知らないのが現状。家族が身近なセンターに求めるものがわからない。・妊娠中からの支援が必要と感じている。
- ・ サークル活動の金銭的支援を求められること。
- ・ やはり必要性を感じていても、細やかにサポートできていないこと・・・全戸訪問にて育児の状況は分かるものの母親のニーズに沿った支援は難しい。

表6 各多胎児サークルが抱えている課題

#### 行政のサポート・対応

- ・ 多胎サークルの立ち上げ時は保健センターの事業として、保健師主導で月1回の交流会行っていたが、運営スタッフが立ち上がった頃から自主的なサークル活動になり、保健師の介入がなくなってきた。サークル運営の助言やスタッフの育成等保健師にサポートをしてほしい。
- ・ 現在母子手帳交付時にサークルの紹介をして、広報しているが、対象者のニーズから、多胎妊婦や、産後間もない多胎児家庭への家庭訪問や電話相談を行っている。地域の母子保健に関することであるので、行政と協働で実施したいが、経費削減や個人情報問題もあり難しい。
- ・ 外出できない状況にある方や、産まれて間もない方達に、情報を届けたいが、行政との連携が今ひとつできず、残念である。個人情報保護を配慮する事が必要なので、こちらから連絡する事も難しい点がある。
- ・ サークルを行う場所のなど、幼児が使う観点から、受け入れてもらいたい。

#### スタッフの世代交代

- ・ 子どもが入園すると参加されなくなり、繋がりがなくなってしまう。繋がりを少しでも保つために、会報を就学前まで送付しリサイクルの協力やスタッフ募集を呼び掛けているが、特にスタッフ募集の反応が少ない（働く方が多いため、難しい面がある）。子どもが大きくなっても参加できるような活動も考えていかなければならないと思っている。
- ・ 子どもが入園時点でサークルを退会される、その後OGという形でお手伝いをお願いして、イベントを行っている。が、サークル発足時と違い、OGの方も働く方が増え、その分、スタッフとして手伝いをしてくださる方が減っている。サークルメンバーも発足時は「自分達で作っていく」という意気込みがあったが、現メンバーはサークルの形が出来上がってから入ってきているので、「自ら動き出そう」という気持ちにずれを感じる。
- ・ サークルが多人数になってくると、組織運営とスタッフの育成が今後重要になってくると思われる。

#### スタッフへの負担

- ・ メンバーが増えていく事はありがたいが、連絡・連携ミスになる事も否めないで、リーダーとして連絡等の配慮に気が使う事が増えた。
- ・ 交流会などを開くにあたって、働くお母さんが多い為、なかなか協力がもらえない現状がある。
- ・ 会報製作、発行等を、1人の方が請け負っているため、負担が大きい。

- ・ 2人の子どもの育児をしながらの、スタッフの役割は負担が大きい。
- ・ 代表、会計、広報と役割を決めているが、代表が交代したり活動場所が変わったりと運営が軌道にのるまで時間がかかる。

#### サークル活動内容の向上・経済的負担

- ・ 子ども達が成長してきたので、子ども主体の「自主活動」を考えていく時期にきている。また、せっかく異年齢（小5～0才）で繋がっているの、これを活かした行事も考えたい。
- ・ 多胎妊婦の方の参加も促していきたいと考えている。 ・ 他の組織との交流や、託児などの援助を考えたい。
- ・ 条件を満たす会場確保が難しい。 ・ 会のマンネリ化。 ・ サークル運営する上で経済的に苦しい。

家族の協力 ・ 父親の参加と繋がりを強めたい。

会員の確保（入会・退会）・広報 ・ 会員の確保や広報をどうしていったらいいか考えている。

表7 家庭訪問に双子の先輩ママが同伴することについて

#### 先方の同意や保健師の配慮があればよいと思う・43件

- ・ 経験している母親が一番の理解者だと思うし、いろんな情報や経験談も聞くことができ、今後の橋渡しにもなると思うので実際に訪問が行えればよいと思います。
- ・ 相手先が望まれれば良いことだと思うが、初めから同伴することは個人情報の保護からいって難しいと思う。
- ・ 相手の了解があればよいと思う。 ・先輩ママと話す機会は必要だと考える。 ・とても参考になるので良いと思う。
- ・ 個人情報が保護されることを原則とし、訪問対象者の同意が得られれば良いと考える。
- ・ 両者に同意が得られれば、具体的な体験談が聞けて良いと思います。
- ・ 具体的なアドバイスが受けられるのは良いと思いますが、訪問の目的によっては難しいこともある。
- ・ 気持ちや問題点を共有するためには良いと思う。
- ・ 両者の了解が得られれば良いと思うが、先輩ママの考えのみが強調されないように配慮が必要。
- ・ 多胎児の場合、相談する相手がほしいと希望があるため、良いことだと思う。
- ・ 育児サークルについて問い合わせがあり、近隣町村を紹介したことがあるが、一人では参加しづらい様子あり→同伴により知り合いができるのは良いことだと思う。
- ・ お互いの了承さえあれば、良い相談相手となり良いと思う。
- ・ 訪問先と先輩ママの訪問に対する同意が得られれば、同伴してもらえるとより細やかなアドバイスができると思います。
- ・ 訪問時などに、よく同じ双子のママと話したい、アドバイスがもらいたいということを聞くので、良いことだと思う。事前の訪問同意が必要。（システム化）
- ・ 実際、多胎児の先輩ママに話ができることは、共感や教えてもらうことが多く、良いと思う。
- ・ 双方の了解が得られれば良いことだと思います。育児について、具体的な経験談等聞けること。
- ・ その後のアドバイザー（相談相手）としてもつながってもらえると良いと思うので。
- ・ 初回訪問以降であれば、何かと情報がもらえていいと思う。
- ・ 母親の同意もとの訪問ならば可能と思う。出産後、特に多胎児の場合については協力者がいないと自ら出向くことは困難だと思うため、家庭において話を聞いてもらえるなどの場が持てるのはよいことだと思う。
- ・ プライバシーのこともあるが、了解が得られれば実施した方が良い。不安、悩みもあると思うので交流が必要と思う。
- ・ 初めは保健師のみ訪問し、母が希望される場合には多胎児の先輩ママを紹介していく。
- ・ 対象の方、先輩ママさんお二人とも了解が得られれば大変良いことだと思います。
- ・ ご本人の悩みの内容や希望を確認した上であれば良いと思われます。（妊婦の時から多胎サークルで顔つながりになっており、訪問に同行しなくても良い状況となっています）
- ・ 訪問時期にもよるが、なかなか外出できない時に先輩仲間からの育児情報が得られることで、訪問先の母は安心できるかもしれない。
- ・ 先輩ママが協力して頂け、訪問家庭にそのようなニーズがあれば、日程調整できれば可能だと思う。
- ・ まずは事前に当事者の了解が必要と考えます。当事者が先輩ママとの交流を希望する等、そのことがその当事者にプラスになることが、時期を判断して行うことが大切と考える。

#### わからない、考えていない、難しい

- ・ わからない。 ・ 考えていません。 ・ ねらいは別なので、別の機会の方が良いかと思う。
- ・ 多胎児を持つ保護者にとってメリットがあると思うが、個人情報の問題や往復の交通の問題（事故等）謝礼等の問題があるので、訪問に同伴することは難しい。 ・先輩ママはサークル活動等、行政の家庭訪問とは違った角度から関わってもらってはどうか。